香・美・人 29

全日本コンクール銀賞 鏡野吹奏楽団団長

藤原 哲さん

昨年10月に福岡市で開催された全日本吹奏楽コンクールの『職場・一般の部』で、見事銀賞に輝いた鏡野吹奏楽団。同楽団の銀賞受賞は91年の受賞以来22年ぶり。団長の藤原哲さん（土佐山田町・東本町）にお話をお伺いしました。

▲昨年の全日本吹奏楽コンクールで演奏する鏡野吹奏楽団

藤原さんは友達に誘われ、鏡野中学校の吹奏楽部に入部。体格の良さからチューバの担当を任されました。

藤原さんが進学した高校には吹奏楽部がなく、また、当時、山田高校にも吹奏楽部はありませんでした。鏡野中学校の卒業生が作っていた楽団がありましたが、ほぼ活動休止状態でした。

藤原さんは高校1年の終わりに、当時の鏡野中吹奏楽部の顧問の先生らと新たに**鏡野中学OB吹奏楽団**を結成し、初代団長を務めます。77年のことです。やがて、同楽団はOBの枠を外し、**鏡野吹奏楽団**となりました。

藤原さんは「当時45人ほどの団員がいたが、練習に5人しかこない日もあり、合奏にならず、雑談で終わることも多かった。87年には、考え方の違いから1年間、楽団を去った」と、これまでの苦労を話します。

藤原さんは鏡野中学校在学時の校長である濱田義英同楽団後援会長に「このままじゃいかん。もう一度やり直せ！」と言われ、楽団に団長として復帰し、自分の思いを団員に伝えました。当時はコンクールも四国予選止まりだったそうですが、団員は、藤原さんの「全国を目指して行こう」という呼びかけに応え、猛練習の結果、翌年の89年に全日本吹奏楽コンクールで金賞を受賞。藤原さんは、「この金賞が、鏡野吹奏楽団の本当の意味でのスタートだった」といいます。

現在、鏡野吹奏楽団は団員約70名。香美市立中央公民館で、月に6回程度集まり、練習を行っています。

今回の受賞については、「みんなの思いが一つになる曲での挑戦だった（2年前に39歳で亡くなった団員にささげる曲を作曲家に依頼し、コンクールでの自由曲に選び演奏した）。団員も涙を流して喜び合った」と話し、「私のことよりも楽団を大きく取り上げてほしい」と話す藤原さんから、楽団を思う気持ちが伝わってきました。

鏡野吹奏楽団

77年に鏡野中学校卒業生を中心に結成。県予選・四国予選を突破し、全日本吹奏楽コンクールに20回出場。89年に金賞を受賞。93年には**シドニー・オペラハウス国際音楽祭**に日本代表として出場し、グランプリを獲得。同年、団体としては初めての土佐山田町民賞を受賞。94年には高知県文化賞を受賞。同楽団の前身の歴史は古く、大正5年、鏡野尋常高等学校にブラスバンドがおかれたことに始まり、昭和21年にはOBによる鏡野吹奏楽団（同名）が結成され、県内の諸行事で活躍していた。

鏡野吹奏楽団定期演奏会
5/24（土）18時30分～
場所　県民文化ホール
問　香美市文化協会事務局
生涯学習推進課☎53－1082

▲自身の演奏するチューバと

ふじわら・さとし

鏡野吹奏楽団団長。
鏡野中学校吹奏楽部出身。
高知市役所職員。53歳。

香美市文芸 風の流れ

【短歌】 岡崎　桜雲　選

渋皮煮友に送れば電話にて親でも出来ぬ手間隙かけてと　法光院俊子

実生木の柚子はお顔をみがかれてどんなお店に並ぶでしょうか　中村　梅子

元旦の隠やかな陽の庭先に孫遊ぶ声はじける幸せ　楮佐古きよ

頼られて幼き吾も麦踏みき吹き荒ぶ雪頬に受けつつ　森本　幸美

来てみれば友は納屋にてヤッコネギ揃える手元てきぱきとして　公文多賀子

健やかな九十代の兄二人米寿間近に吾も後追ふ　小松　隆之

風のなき盆地の空の飛行雲一直線に山から山へ　坂本美智子

鳥小屋の戸口より出ていし地鳥待つ内にまた帰り餌食う　小野寺朱実

毎食の頂く米の白き飯戦中思えば心おだやか　森　楓

TPPは大国の意志に統べられむ穂田渡りくる風はうましも　大岸由起子

仮の世に巡り逢ひたる友垣よ次なる世にもまた目見得むや　都築　忠義

幼より睦みし友の弔の今朝の初雪心浄めて　岡田美代子

厚き介護受けて月日の流れ早し明日は思わず穏しく生きん　門田　喜美

冬晴れの物部の水は清々し畑の媼忙しく働く　武田　晶世

若水を汲む病妻と心新たにお芽出度う交し容態気遣う　高野　和一

アシタバの花の中にてカマキリは大きな腹で時を待ちおり　小松　敏子

まだ少し働く脳や次の色定めて向かうわが絵を前に　坂上のぶ子

ひとしづくひとしづく落つる雨垂れに出会ひと別れを思ひてゐたり　山﨑　貴子

窓下のびわの木五本びわ色の花もこもこと冬の日を浴ぶ　盛岡　雛子

生きる意味誰もがみんな旅人だ茨の向こうに真実は待つ　久岡　史明

わけ合いて一口チョコのとんろりと舌にとけゆく皺の顔顔　韮生　灯

この春にベースアップと言われるがTPPはどこへ何処へ向かう　公文　千恵

人生の節目に立ちて弾みおりきらめく夢に舟出もたのし　谷内　務

「ただいま」と元気に帰る筈でした帰れなかった人らを思う　吉本　悦子

白寿荘毛筆教室もり上がる九十五歳媼の筆跡　門田　明子

酸味濃きゆず玉加工は奥深し香りはじきてジャムの煮つまる　武内　弘子

靴・上着いくつも持てる孫たちに南スーダンの子らを語りぬ　古川　安子

内戦に苦しみ居るへ銃弾を提供すると日本の首相　竹村　咲子

穏やかな新春迎え初詣すべての人に幸多かれと　林田　幸子

寒風に空き缶カラカラ転びゆくからだ冷え込む元日の朝　小松　禮子

たれ一人姿の見えぬ集落の屋根に畑にはじめての雪　松中　賀代

ふる里の寒さを計る目標は白髪、石立頂の雪　大石　綏子

初日さす山の彼方を拝みたり今年の無事をひたすら願ひ　高橋　章

ひさびさに聞く衣擦れの心地よし帯結び終へて鏡をのぞく　公文　正子

ひと筋に貫きまし君の強さを今ここに知る面やすらかに　小松もとみ

暮れかかる鏡野公園に人ありて案山子はずすと黙もく動く　伊藤　清子

親なれば心おだやかならず聞くこの夜津軽に吹雪くおほ雪　佐竹　玲子

音低く掛けて全員寒々と体操しをり工事場の朝　都築　初代

弟の誕生喜ぶ兄と姉家族和みて笑い声増える　近藤　由美

やがてくる黄昏時よあかね雲影も残さず消えてゆきたり　大石紗智子

食事前お菓子を食べる十歳に注意をすれば別腹と云う　古谷　由美

ふるさとは次第にとおく今朝の紙に氏神様の頭屋の話　佐々木真里

子供等が育てしもち米四俵もここに振舞う学校の祭り　宮地　亀好

上がり来る従姉妹は飯を捨てるなと釜洗う我に米作りを言う　山﨑　淑子

紛れもなきかの夕映えか花街道によみがへりくる先生の声　林　敏子

俳句は偶数月、短歌は奇数月に掲載。掲載希望の方は、掲載月前月1日までにご応募ください。選者添削不要の場合は添削不要と記してください。

【投稿先】香美市役所総務課内広報委員会事務局「俳句・短歌」係
〒782－8501（住所記載不要）　FAX 53－5958